

## 〈論文〉

# 米国カリフォルニア州における セサル・チャベス主導の農業労働者運動 —成功要因再考—

吉 木 双 葉

## I はじめに

## 1 問題の所在

本稿の分析対象は、1960年代からカリフォルニアで展開されたセサル・チャベス主導の農業労働者運動である。そして、複数の問題を抱えながらも、なぜ運動<sup>1)</sup>は結果を出すことが出来たのか。これが本稿の大きな問いである。

セサル・チャベス (César Estrada Chávez) は、1927年にアリゾナ州でメキシコ系の移民家庭に生まれた人物である。大恐慌の影響で農場を失いカリフォルニア州に移住、一家で農業労働者となった。1952年頃より、コミュニティサービス組織 (Community Service Organization, 略称CSO) の活動に携わる。1962年、のちに全米農業労働者組合 (United Farm Workers of America, 略称UFW) として拡大再編成される全国農業労働者協会 (National Farm Workers Association, 略称NFWA) を結成し<sup>2)</sup>、1993年に死去するまで農業労働者の地位向上に努めた。1966年には米国史上初めて栽培主と農業労働者の間の組合契約を達成したり、それまで法的な保護を受けられなかった農業労働者について、1975年のカリフォルニア労働関係法制定にこぎついたりした。本稿では、組合契約の達成、州法の

成立の二つを運動の大きな成果と捉え、これらを以て運動は成功したという前提に立って議論を進める。

しかし、過去の農業労働者運動はストライキ中心であり、ボイコット等の UFW の抗議行動は、農業労働者にとって親しみのないものであった。また、農業労働者運動は、資源<sup>3)</sup>の不足から継続させることが困難であり、表だって農場主に反抗することを恐れる労働者も多かった。更に、場所を転々としながら働く農業労働者の中には、運動に取り込めるような地域的なネットワークも存在しなかった。

これについて、運動が制約を抱えながらも成功に至ったのは、他の組織等からの積極的な援助が存在していたからである、との指摘は既になされている (Jenkins and Perrow 1977)。しかし、そうした援助が UFW に集中したのはなぜかという疑問も生じる。

本稿では、組織内部、すなわち組合員の手によって生み出された戦略に着目することで、問題が解消された過程が明らかになると考える。特に、演劇、新聞の発行、チャベスの言動という、UFW 独自の、組織と個々の労働者を相互に繋ぐ機能を持っていた戦略を、第IV節にて取り上げる。本稿では、組合幹部が用いた一連の戦略を、組織外部、すなわち他の組織や組合員以外の人々からの援助とは区別し、まとめて「コミュニケーション戦略」と呼ぶ。そして、時期によってどういった戦略が使われ、それがどの問題の解決につながったのかという切り口から考察を行い、複数のコミュニケーション戦略が UFW の運動の成功に寄与していたことを明らかにしたい。

## 2 先行研究

運動の成功について考察した先行研究として、まず三つの論文を挙げる。

ジェンキンスとペロウは、1965年から72年の UFW の運動の成功を、政治環境の変化・外部資源の増加という外的要因に焦点をあてて説明してい

る (Jenkins and Perrow 1977)。時代の変化と共に運動の支えになる外部資源が増加したという議論は一貫しているものの、論の中心はあくまで組織の外部であり、組織の内部については殆ど言及がない。

一方、組織の内部に着目したものとしては黒田 (2000) がある。黒田は、7つのメキシコ系文化が組合運動に活用されて来たと述べる<sup>4)</sup>。しかし、それらは全て民族文化に限られている。運動に参加していたのは、メキシコ系の人々だけではなく、ストライキにはフィリピン系の労働者が、ボイコットにはアングロ系の住民らも参加していた。メキシコ系以外の人々をも動員する工夫が複数なされており、UFW の運動の成功要因を考察する時、それらを記述することが不可欠だと考える。

Ganz (2000) は、本稿の関心と重なる部分が最も大きい。彼は、NFWA と同時代に活動していた、フィリピン系の農業労働者を中心とした農業労働者組織化委員会 (Agricultural Workers Organizing Committee, 略称 AWOC) との比較を通して NFWA の運動の成功要因を明らかにしている。NFWA が成功したのは、リーダーがメキシコ系のコミュニティに関する知識やコミュニティ間のネットワークを豊富に持っていたこと等、AWOC にはない強みが複数存在しており、それらが相互に作用したため、という結論に至っている。外部資源など構造的な要因に着目するだけでなく、そうした構造的なものをなぜ UFW が運動に取り入れ、活かすことが出来たのかを考えている点で、本稿と軌を一にしている。

しかし、本稿は以下の二点でガンズとは異なる。一点目は、既存のネットワークを運動に取り込むよりも、UFW は新しいネットワーク作りに長けていたということを示す点である。二点目は、リーダーの抗議行動に関する知識を、実際の運動に運用する過程に着目する点である。

こうした学術論文に加え、チャベスや UFW の基本的な情報については Taylor (1975)、Levy (2007)、Pawel (2009) といった資料も参照する。Taylor (1975) は、新聞記者である著者が、組合の幹部、農業労働者へのインタビュー等を基に書いた、UFW の最盛期と同時代の記録である。

Levy (2007) は、ジャーナリストである著者が、チャベスやその家族の語りを文字に起こしたものである。Pawel (2009) は新聞記者の著者による1965-89年という長いスパンの、チャベスの周辺人物8名の語りと活動の記録である。このように時期と視点の異なる伝記・記録より得られた情報を、チャベスやUFWに関する記述の土台とする。

### 3 研究方法

本稿では、新聞記事、チャベスのスピーチの筆記録、演劇の SCRIPT 等を主要な一次資料として位置づける<sup>5)</sup>。本稿では、運動に参加したり、関心を持ったりした様々な人がアクセス可能であった組織の戦略に着目し、考察することを目的とする。そのため、本稿の中心となる第IV節においては、公にされたコンテンツの分析が主になる。特に、組合が発行していた新聞、*El Malcriado* は当時のリアルタイムな情報及び組合幹部や労働者の声が豊富に掲載されており、依拠するところは大きい。ただし、公式なコンテンツを主要な一次資料として位置づけると、コンテンツの受け手の視点をほとんど含めることが出来ないという限界がある。しかし、組合幹部やチャベスがどういった方法で労働者らにコンタクトを取り、何を訴えかけていたのかを分析するという一つの目的を達成することは十分に可能であると考え、こうした方法を選定した。

以上の一次資料に加え、本稿では主に二つの社会運動理論を参照する。第一に、抗議行動の手段(レパトリー)は、運動組織やリーダーが過去の経験から既に知っているものに限られる(Tilly 1978: 151)、という抗議行動のレパトリーに関する理論である。第二に、組織外部から流入する資源の増加を中心に運動の勃興を説明しようとする資源動員論<sup>6)</sup>である。しかし、本稿ではこれらの理論をそのまま援用するのではなく、①組織にとって馴染みのないレパトリーが実行される過程、②外部資源の利用だけではなく、農業労働者を動員し、ネットワークを構築する過程、③流入していた資源が長期的にUFWを支え続けたのはなぜか、といった既

存の理論だけでは説明出来ない点に目を向けていく。

## II UFW の抗議行動概観

第II節では、UFW の抗議行動のレパトリーを、時系列に沿って概観する。UFW の抗議行動は、それまでの農業労働者運動のレパトリーには含まれていないものであり、先に述べたレパトリーに関する社会運動の理論がそのまま適用できない。では、UFW の抗議行動のレパトリーは一体どのようなものだったのか。

### 1 栽培主への抗議行動

初めに、ストライキ、デモ行進、ボイコットの順で、UFW の栽培主への抗議行動がどう始められ、展開されたのかに言及する。

組合は、1962年9月30日、カリフォルニア州のデラノ市でNFWA の名で結成された。この時、200人以上の労働者が集まり会議が催され、セサル・チャベスが代表に選出された (Taylor 1975 : 115)。デラノで農業労働者から現状に対する不満や要望を直接聞き、彼らと草の根の対話を続けていたチャベスの努力が、実を結んだ瞬間であった。

元々、チャベスはCSO という、メキシコ系の人々のための地域の福祉的な組織でオーガナイザーを務めていた。自身も農業労働者であるチャベスは、農業労働者の置かれた過酷な状況を改善しようと、以前から組合の設立を計画していた。そこでCSO を通じて農業労働者の組織化を図ろうとしたものの、他のメンバーの反発に遭い失敗し、CSO を脱退しデラノへ移ってきたという経緯がある (Bruns 2005 : 29)。

初めて組合が大きな行動に出たのは、1965年9月20日のデラノ市でのストライキであった。きっかけは、9月6日、果物会社のディジョルジオ (DiGiorgio Fruit Corporation)、ブドウ園を経営するシェンレイ (Schenley Vineyards Corporation) などに対し、賃金の上昇や労働環境の改善を要求して、フィリピン系が多くを占めるAWOC がストライキを起こした

ことである。その頃の労働者は休暇も取れず、健康保険等からも除外され、水も満足に飲めないような状態で働いていた (Pawel 2009 : 9)。こうした状況を改善しようと、AWOC は行動に出ていたが、農業労働者の大半はメキシコ系の人々が占めていた。そこで、AWOC が、ストライキへの協力を依頼してきたため、NFWA は多数決で、参加するか否かを問うこととなった。9月16日の会議には約1200人が集まり、ストライキへの参加が決定された (Chávez 1966 : 50)。しかし、熱狂的な雰囲気の中始まったストライキも、半年を過ぎた頃には多くのストライカーが仕事に戻り、世間の関心を失いつつあった (Pawel 2009 : 19)。

苦しい状況を打破するために始まった抗議行動が、デモ行進とボイコットであった。デモ行進が最も盛り上がりを見せたのは、1966年3月17日からの約300マイルに及ぶ大行進である。出発した頃は60人程度だった参加者も、終りの頃には約1万人に達したという (*El Malcriado Eng.* April 21, 1966 : 14)。

ボイコットは1966年春から始められた。消費者にブドウの不買を訴え、ブドウを仕入れるスーパーマーケットには、店頭でブドウを並べないよう要請した。また、カリフォルニア以外の都市にも組合員を派遣し、現地の人々の力を借りながら、闘いの場を拡大させていった (Levy 2007 : 223)。

1966年5月末には、シェンレイがNFWAを正式に組合として承認し、契約が結ばれ、アメリカ合衆国アグリビジネスの歴史上初めて、農業労働者が組合と契約の存在によって保護されるという成果をあげることが出来たのである。

この契約を皮切りに、組合は次々に栽培主との契約を締結する。1967年には、ディジョルジオとの抗争が勢いを増した。8月末にディジョルジオは、どの組合と契約をしたいかを労働者に問う選挙を行うことになっていた。ディジョルジオは、より緩やかな条件で契約することを承認した別の組合を優遇し、一度、農業労働者でない人々にも投票させる不正選挙を

行った (Levy 2007 : 231)。カリフォルニア州の調査により再選挙となったが、自らの不利な立場を知った NFWA は、AWOC と合併して選挙に備えることに決める。8月22日の合併の結果生まれたのが、統一農業労働者組織委員会 (United Farm Workers Organizing Committee, 略称 UFWOC) である。

ディジョルジオの次は、カリフォルニアの食卓用ブドウのシェア第一位であったジウマラ (Giumarra Vineyards Corporation) がボイコットのターゲットとなった。しかし、ジウマラはボイコットに対抗するため、他の栽培主からラベルを借用し始めており、ジウマラのラベルの製品をボイコットするだけでは、打撃を与えられなくなった。そこで、組合はカリフォルニアの食卓用ブドウ全てをアメリカ全土でボイコットするという決断に出たのである (Pawel 2009 : 51)。その為、多くの都市に組合員を派遣し、1967年の終わりまでに国内34都市にボイコットの拠点を置くようになった (Bruns 2005 : 58)。

ターゲットの栽培主を次々と変えた組合は、今度はターゲットの作物を変えていった。ブドウの次はレタス農場を相手に闘いを始めた。1970年頃、ほとんどのレタスの栽培主が、栽培主に対して好意的な組合と、労働者に知らせることなく契約を結んでいた (Bruns 2005 : 71)。そこで、UFWOC はブドウのボイコットと同様に、UFWOC と契約を結んでいない全てのレタス栽培主の作物のボイコットを全国的に呼び掛けた。

翌年 UFWOC は、AWOC と別れ、AFL-CIO<sup>7)</sup> から正式に認可され、UFW という名前に変わる (Bruns 2005 : 74)。そしてこの頃には、組合員数は7万人程度まで膨れ上がっていたという (UFW 公式ホームページ)。

1973年、3年間の有効期間を設定していたブドウの栽培主との契約が切れ、多くの栽培主が、別の組合との「スイート・ハート」<sup>8)</sup> 契約に乗り換え始めた (Taylor 1975 : 15)。そこで、UFW はカリフォルニアで新たなストライキを起こして闘い始める。しかし、このストライキでは、栽培主と

結託した警察などから、多くの労働者が暴行を受けたり、撃たれたりした。

その後1980年代以降も、レタス農場や柑橘類農場でストライキが続けられ、組合は現在も活動を行っている。

以上述べて来たように、ストライキ、デモ行進、ボイコットという三つの非暴力的な抗議行動のレパートリーを柱に、UFW は栽培主と闘い続けた。それだけでなく、UFW は、立法を通じて農業労働者を不利な状況に陥れようとする政治家や政党との闘いをも強いられた。2 では、法律を巡る争いを軸としながら、公的機関に対する抗議行動について述べたい。

## 2 公的機関への抗議行動

UFW は政治的な活動も行い、農業労働者の地位向上に努めた。争いの根底には、農業労働者が、集団的な抗議行動をする権利が法的に認められていないという特殊な立場に置かれていたことがある。彼らは、1935年に制定された全国労働関係法（National Labor Relations Act, 略称 NLRA）の保護対象から外されていた。NLRA 第2条（3）の規定で、被雇用者には「農業労働者として雇われている個人は一切含まない」と明記されている（NLRA. 29 U.S.C. § 152（3））。この法律は、自主的な組織結成、団体交渉の権利など基本的な労働にまつわる権利を認めるものであった（NLRA. 29 U.S.C. § 157）。すなわち、組合が活動を始めた頃には、こうした基本的な権利さえ認められていなかったということが前提としてある。

こうした複雑な状況の中、根本的な問題を解決するには、栽培主との間の契約を増やすために行動するだけではなく、農業労働者の厳しい状況を訴え続けることが組合には求められた。その貴重な場として機能したのが、公聴会の席であった。

また、農業労働者は度々、法的に更に不利な立場へと追い込まれそうになり、UFW はそれを防ぐためにも政治的な活動を行った。大きな活動が初めて行われたのは、アリゾナ州においてである。1972年の5月11日、ア

リゾナ州で農業労働者にのみ適用される新しい州法が成立する。この法律は、農場で組合員が組織化することを厳しく制限するものであった。労働者にとって不利な州法の成立を受けて、UFW は、州知事のリコールをしようと、労働者の署名を集め始める。結局のところ、リコールには至らなかったものの、この「アリゾナ・キャンペーン」とも呼ばれる活動がアリゾナの政治に与えた影響は大きいものであった<sup>9)</sup>。

同時期のカリフォルニアでは、1972年11月に投票に付される、住民提案22号が問題となった。この提案は、市民がボイコットを呼び掛けること、100日以上雇われていない労働者が組合選挙に参加すること等を全て禁止する内容であった (*El Malcriado Eng.* October 27, 1972 : 5)。しかし、組合幹部の働きかけにより、投票の結果、住民提案は却下されることとなった (Taylor 1975 : 284)。

住民提案22号を巡る争いをきっかけに、チャベスは農業労働者に有利な法律を作りたいという思いを強くした。そして、組合承認の秘密投票を指揮監督する3名からなる労働関係委員会の創設を促す法律を、州知事に提案したのである (Taylor 1975 : 328)。その結果、1975年6月、カリフォルニア農業労働関係法 (California's Agricultural Labor Relations Act, 略称 ALRA) が成立する。ALRA では、「集会の自由、自主的組織結成、自分たちの意思での代表者の指名」が法によって保障されるようになった (ALRA § 1140.2.)。これによって、カリフォルニアの農業労働者は、秘密投票を通じて組合を自分たちで選び、団体交渉をすることが、合衆国史上初めて合法的に出来るようになったのである。

このように1975年には農業労働者は勝利を掴んだように見えたが、その後も闘いは続いていた。栽培主が ALRA を無視し始めたためである。そこで UFW は、ALRA で認められた権利が侵害されないよう定めた住民提案14号を、住民投票にかけることにした。住民提案14号は、州議会は ALRA を遂行していくのに必要な財源を提供すること、組合のオーガナイザーが農場に入り、労働者と話をするという州の最高裁判所が是認して

きた「アクセス・ルール」を認めるよう法令を改正することの二つの要求が柱であった (*El Malcriado Eng.* September 17, 1976 : 3)。UFW は賛成票を投じるよう呼び掛ける活動を展開したが、栽培主はラジオやテレビを通じた大規模な「反14号」の宣伝活動で対抗する。1976年11月の投票の結果、組合は敗れることとなった (Pawel 2009 : 195)。組合運動は、住民投票敗北を機に徐々に衰退に向かっていく。

本節において概観したように、UFW の運動において様々な抗議行動のレパトリーが用いられ、運動が拡大していったことは既知の事実であるが、栽培主への抗議行動でも、公的機関への抗議行動でも、それまでの農業労働者運動では見られないようなレパトリーが用いられたという点は問題として残る。そして、それ以外にも UFW の抗議行動の裏には複数の問題が潜んでおり、UFW は問題を解決しながら、抗議行動の目的を達成していた。では、いったい、問題とは具体的にどういったものであったのか、UFW はそれをどのように解決していたのだろうか。

### Ⅲ 抗議行動の問題とその克服

#### 1 UFW が直面していた抗議行動の問題

1 では、UFW の抗議行動の問題を三つに分けて考察していく。

第一に、農業労働者が組織的な行動を起こし、継続させること自体が、経済的な観点から考えて困難だったという問題がある。労働者は貯えを残しておくほどの賃金はもらえず、賃金を危険にさらすことに抵抗を持っていた (Jenkins and Perrow 1977 : 252)。こうした問題は、20世紀の初めから、チャベスの時代まで根本的には変わらなかった。

実際のところ、1960年代以前にも、農業労働者の組織化は度々試みられた。例えば、1910年代には AFL が果実農場の労働者を、1930年代には CIO が「オクラホマ州人」<sup>10)</sup>の組織化をそれぞれ図った。しかし、どちらも長期にわたり労働者の生活を向上させたり、栽培主との契約を結んだりするには至らなかった (Ganz 2000 : 1020)。

チャベス自身、資金面では苦しい状況に陥っていた。彼が組織化の場としてデラノを選んだのは、親戚がデラノに住んでおり、失敗しても食事には困らないだろうと判断したためである。組合もストライキを始めた頃は70ドルしか資金がなかったという (Jensen and Hammerback 2008 : 13, 26)

第二に、初期の抗議行動であったストライキのリスクが挙げられる。過去の農業労働者運動を振り返ると、主に二つの要因からストライキはリスクが高かったのではないかと考えられる。一つは、スト破りの動員により、農業労働者のストライキが何度も挫かれていたということである。もう一つは、栽培主と労働者間の力の差により、ストライキを起こしたことで解雇や逮捕に至るなど、労働者にとって不利な状況を生み出していたということがある。

まず、スト破りについて言及したい。UFW が活動を始める前、スト破りを行っていたのは主に「ブラセロプログラム」<sup>11)</sup>によってアメリカに流入してきたメキシコ人労働者であった (Meister and Loftis 1977 : 202-235)。1942年7月の米墨間の行政協定で発足したプログラムは、1964年まで実施され、アメリカの労働市場に大きな影響を及ぼした。しかし、プログラムが終了すると、グリーンカード移民と不法移民が流入する。彼らはブラセロに代わってスト破りに使われ、UFW も彼らの存在に苦しんでいた。

次に、栽培主による解雇や逮捕の問題がある。例えば、組合と契約を結んでいたディジョルジオがSA キャンプという別の会社に農場を売り渡したところ、SA キャンプは農場を買ってすぐに、組合活動に関わっていた労働者を解雇している (U.S. Congress 1969 : 8)。また、逮捕に関してチャベスは、「私たちの中でも150人以上の逮捕者が出たけれど (ストライキを起こした何人かは5回も逮捕されている)、有罪判決はたったの一回だけだった」と話している (Jensen and Hammerback 2008 : 29)。スト破りの利用もそうであるが、栽培主・労働者間の権力関係が、解雇や逮捕と

いう強引な対応へと繋がっていたのである。

ここまで述べてきたように、経済的な理由、ストライキの高いリスクという二つの理由から、農業労働者が、表立った抗議行動に出るのは、容易なことではなかった。

そして第三に、UFWの一連の抗議行動は、農業労働者が慣れ親しんだレパトリーではなかったという前述の問題がある。UFWの抗議行動は、過去の農業労働者運動よりも、同時期に展開された公民権運動のレパトリーと類似している傾向にある。デラノからサクラメントまでのデモ行進が行われた前年の1965年には、アラバマ州のセルマからモンゴメリーまでの大行進が実施されていた（Ganz 2000：1032, 1038）。また、ボイコットにも、1955年のモンゴメリーでのバス・ボイコット運動が画期的な事件となった公民権運動の影響がある<sup>12)</sup>。

UFWのレパトリーが公民権運動と似ているのは、チャベスが公民権運動の指導者であるキング牧師と親交を結んでいたからである。こうした協働関係があれば、レパトリーの選択に相手方の組織からの影響が及ぶのは、自然な流れである（della Porta and Diani 2006：182）。しかし、自然な流れであっても、他の運動のレパトリーを定着させるには、そのまま模倣するのではなく自分たちの状況に合わせて変化させる必要がある（Chabot 2002：100）。

以上、三つに分けてUFWの抗議行動が抱えていた問題を指摘してきたが、問題を抱えながらもUFWが成果をあげた背景には、何が存在していたのだろうか。

## 2 問題の克服

2では、それぞれの問題がどのように克服されていたのかを述べる。

第一の問題であった経済的な困窮の克服については、先行研究にもある通り、様々な外部組織からの援助が大きな役割を果たしていた。

特に、教会からの支援がUFWを支えていた。ストライキを始めてすぐ

のうちは、プロテスタント組織が積極的な援助を行っていた (Chávez 1968)。60年代後半以降は、組合を冷遇していたカトリックも UFW を助けるようになる。カトリック教会の姿勢の転換には、1962-65年に開催された第二バチカン公会議が関係していると考えられる。公会議においてカトリック教会は、「それまで背をむけてきた近代化・世俗化の進行に適應する自己変革の方途を模索」し、結果、「民衆とともに歩む教会の姿が構想」された (石橋2000: 36)。組合を支援し、労働者に寄り添おうとするカトリックの聖職者が現れてきた背景には、公会議の存在があった。

教会と並んで重要な役割を担ったのが、学生である。1965年には、チャベス自身が大学に赴き、資金調達のためのスピーチを行った。スピーチの結果、活動資金を得るだけでなく、ストライキの現場でボランティアとして働いてくれる人材を確保することが出来た (Ganz 2000: 1033)。カリフォルニア大学ロサンゼルス校等のメキシコ系の学生組織は、チャベスの運動に刺激を受け、デラノへ食糧を運ぶ活動を行ったりした。

ボイコットの局面では、政治家もブドウの購買を止めるよう自ら呼びかけていた。特に、ロバート・ケネディ<sup>13)</sup>は UFW とチャベスを全面的に支援した。こうした各方面からの支援体制こそが、ボイコットを中心とした UFW の運動を長期にわたって効果的なものにしたのである (Jenkins and Perrow 1977: 264)。これは、人手や資金などの資源不足に苦しんでいた UFW にとって大きな意味を持っていた。

外部資源の流入の理由を、ジェンキンスとペロウは、時代の流れや政治的・社会的環境に求めている (Jenkins and Perrow 1977)。農業労働者運動の場合、組合に対して寛容な政治家の存在、公民権運動・ベトナム反戦運動など多様な抗議行動の世界レベルでの盛り上がり、第二バチカン公会議の開催などがそれにあたるだろう。UFW が受けていた各方面からの支援が、運動の継続的・全国的な展開に寄与したことは否めない。しかし、そうした構造的な要因で、資源の流入の初めの段階は説明出来ても、流入した資源が長期的に UFW を支え続けたのはなぜか、という新たな問いが

浮かび上がる。

第二の問題であるストライキのリスクについては、様々なレパトリーを組み合わせることで克服を図った。チャベスはストライキのリスクを理解しており、それを補うものとしてボイコットやデモ行進をレパトリーに組み入れた (Jenkins 1985 : 164)。更に、政治的な領域に活動を移したりもした。

しかし、外部からのサポートと、バラエティに富んだレパトリーの選択だけでは解決出来ない問題が存在していた。例えば、初期の頃は、金銭的な援助があったからと言ってスムーズに運動が行われたわけではない。チャベスは以下のように述べる (Chávez 1966 : 48)。

私が最初に思ったことの一つに、よそのお金は、少なくとも初めのうちは、人々の組織化に結びつくものではないということがある。

すなわち、活動資金だけでは労働者を動員出来ないこと、どれだけ周囲の支援があっても、肝心の農業労働者を動かさなければ、「農業労働者運動」は持続せず、発展もしないことを彼は理解していた。

一方で、資源がなくても運動が起きることはあると解されている。公民権運動研究で知られるマックアダムは、「社会の中で最も恵まれない層を除けば、不当に傷ついた集団であっても、自分たちの為に重大な政治的な力を使う能力と、組織化された社会的抗議行動を容易にするある種の土着の資源を持っているのである」と述べる (McAdam 1982 : 30)。公民権運動の中心となった黒人たちは、経済的な資源は持っていなかったが、教会や学生組織といった土着の組織を活用し、それを運動に取り込むことで、人々の動員を図っていたと彼は主張する。

この議論に沿えば、貧しくても、何らかの土着のネットワークがあれば、運動が起きる可能性は高まるということである。しかし、農業労働者は仕事を求めて移動を繰り返すため、基本的には、組合の基盤となるよう

な強固な地域的な結びつきは、存在していなかった (*Time* July 4, 1969 : 17)。もちろん、結びつきが一切なかった訳ではない。しかし、前述の通り、チャベスはCSOという組織を既に持っていたにもかかわらず、メンバーとの対立から、それを運動に取り込むには至らなかったのである。こうした複雑な状況の中でチャベスは労働者をどう工夫して動員したのか。

また、レパトリーの巧みな組み合わせによって、ストライキに固執するよりも良い成果を生み出したことは確かである。しかし逆に、農業労働者にとってUFWのレパトリーは馴染みがないという問題は残ったままである。

ここまでの議論を整理すると、解決していない問題として運動に取り込むことの出来るネットワークの不在、親しみのないレパトリーの多用という二点がある。また、外部資源が集中的にUFWに流入してきた理由も明らかになっていない。

一方、社会運動研究においては、「どんな運動であっても、主要なタスクの一つは、連帯意識の新しい形の創出を促進することによって、コストに勝るような抗議行動への参加の機会とインセンティブを作り出していくことである」という指摘がなされている (Taylor and Van Dyke 2004 : 270)。

実際、UFWの運動の拡大の背景にも、連帯意識及び抗議行動への参加の機会・インセンティブの創出があった。そして、その創出の方法は、組織の中から生まれてきた様々な戦略を通してであり、それこそがUFWの大きな特徴でもある。特に、幹部からの一方的な情報発信にとどまらず、農業労働者の意見をすくい上げる機会を設け、双方向のコミュニケーションを企図した戦略が取られていた。また、メキシコ系と、その他マイノリティ、アングロ系と対象ごとに戦略も微妙に変化させながら、連帯意識の形成に努めた。労働者を動員し、運動を成功させる鍵となったUFWのコミュニケーション戦略を、次節において考察したい。

#### IV 運動の成功に寄与したコミュニケーション戦略

本節で明らかにすべき問いは、UFW はどのようにして、運動に取り込めるネットワークの不在・親しみのないレパトリーの多用という問題を克服したのか、外部資源はなぜ UFW に集中的に流入していたのかという二点になる。

本稿では、こうした問題を解決した要因として、演劇、組合紙、チャベスの言動の三つのコミュニケーション戦略を取り上げる。本稿がコミュニケーション戦略に着目したのは、一連の戦略が積極的に取られていた時期と運動が成果をあげた時期が重なっており、戦略と運動の盛り上がりに関連関係があると判断したためである。なお、コミュニケーション戦略は、新たな抗議行動のレパトリーを組織の成員に普及させ、根付かせるための一つの手段であるとし、レパトリーそのものとは区別して考える。

##### 1 演劇

まず、運動開始直後に展開された、農業労働者演劇について述べる<sup>14)</sup>。

農業労働者演劇が誕生したのは、自身もメキシコ系の農業労働者の家庭に生まれた、ルイス・バルデス<sup>15)</sup>の運動への参加がきっかけであった。バルデスは1965年9月、デラノで行進に参加した後、農業労働者からなる「農民劇団 (El Teatro Campesino, 略称 ETC)」を結成した。その後、彼らは労働者を集めて野外で劇を演じる、デラノの外にツアーに出るといった精力的な活動を行う。ETC の演劇には、大掛かりな装置等はなく、アクト (acto) と呼ばれる即興演劇が中心であった。しかしその中でも、運動への参加を効果的に呼び掛け、労働者を啓蒙するため、複数の仕掛けが用意されていた。ここでは、二点挙げておきたい。

一点目は、言葉の使い分けである。ETC は、英語とスペイン語と「カロ (Caló)」と呼ばれるメキシコ系の人々が使っていたスラングを混ぜて劇を上演していた。1965年に初めて上演された「栽培主の二つの顔 (Las Dos Caras del Patroncito)」では、農業労働者が時折スペイン語で話し、

“Muy hard”などと英語とスペイン語が混ざっている台詞もある (Valdez and El Teatro Campesino 1994 : 18-27)。また、「5番目の季節 (Quinta Temporada)」という作品では、スラングやメキシコ独特のスペイン語がいくつか用いられている。例えば、労働者は登場する際に、“Quihúbole!”<sup>16)</sup>というメキシコの挨拶語を、“Hello”と挨拶した後に付け加える。また、呼び掛けとして中南米に特有の“mano”<sup>17)</sup>という単語がしばしば使われた (Valdez and El Teatro Campesino 1994 : 28-39)。

このように、ETC は三つの言葉を一つの劇、そして一つの台詞の中でさえ混ぜて使っていたため、スペイン語を勉強している者でも、そうした台詞を、瞬時に理解することは難しかったと言われている (Huerta 1977 : 47)。カコが使われていたことから、ETC の劇は初めからメキシコ系という特定のエスニック集団を観客として想定していたことがわかる。

二点目は、敵の存在を明確にした上で、農業労働者がどう行動を起こすべきかを知らせるため、キーワードを分かり易く示していたことである。例えば、「5番目の季節」のラストシーンでは、組合役と栽培主役が争っている。そこで、「契約締結を！」という意味の台詞が、“Sign a contract!”という組合役の英語に次いで、スペイン語でも“¡Firma un contrato!”と労働者の口から繰り返される。ETC は劇の中で、こういったアクションをすべきだ、と直接的に述べたり、論したりするのではなく、クライマックスの部分で、組合を想起させる言葉を盛り込んでいた。

以上のような仕掛けから、ETC は、メキシコ系の人々に闘いの場に来てもらうきっかけを提供するために、劇を上演していたことがわかる。彼らは日常の怒りや不満を徹底的に表現しながらも、それだけにとどまらず、どう行動すべきか、何が重要なのかを観客に考えさせる創りを目指していた。

また、1969年の雑誌 *Time* の記事によると、テキサス州では、40%のメキシコ系アメリカ人が機能的非識字者であったという (*Time*, July

4, 1969: 21)。機能的非識字とは、初歩的な読み書きは出来るが、辞書を引く、新聞記事を読むといった段階にまでは至らないことを指しており、メキシコ系の農業労働者を啓蒙し、動員するのに、文字に頼らない演劇というメディアが果たした役割は大きかったと推察される。

こうして農業労働者が抗議行動に出る機運を醸成した ETC だが、1968 年には UFW から離れて活動を始める。その理由としては、「メキシコ系」というエスニシティを中心に、劇で扱う問題の幅を広げたい ETC と、あくまで「農業労働者」を中心に、運動に巻き込むエスニシティの幅を広げたい UFW との間に考えのずれが生じたということがある。そして、1960 年代後半から UFW はボイコットをメインのレパトリーに据えたこともあり、メキシコ系だけでなく、より多くの人に運動への参加を訴えかける戦略へと移っていく。それ以降、農業労働者が新たな劇団を作った等の記録は見つかっていない。動員のための戦略が演劇から移ったためであると考えられる。1968 年以降も労働者の啓蒙手段として積極的に活用されたメディアとして、組合が発行していた新聞がある。次に、その新聞について考察を行いたい。

## 2 新聞

組合紙 *El Malcriado* は、1965-76 年まで、基本的に 2 週間に 1 回、スペイン語と英語の両方で組合が発行しており、ピーク時には発行部数が 3 万近くに達していた。

以下、この組合紙について分析を行う。なお、スペイン語版については全ての年度のものを入手することが出来なかったため、基本的に英語版を参照している。入手出来たものについていくつか比較を行ったが、紙面を半分にして同じ内容をスペイン語と英語で掲載しているものもあり、分析にあたって特段大きな差は無いと判断した。

発行初年から 1975 年頃までの組合紙は、労働者の手紙や編集部からのメッセージを多く掲載し、組合と労働者、労働者同士、更には地域と地域

を「つなぐ」役割を担っていた。以下、労働者からの情報提供や訴えかけと、幹部からのメッセージ発信の二つに分けて述べる。

まず、労働者からの情報提供としては、投書欄と広告が主な枠組みとなっていた。投書欄には、米国諸州から編集部へ寄せられた手紙が載せられた。また、読者からの情報提供として、手紙だけでなく歌や詩、漫画、写真など様々な表現媒体を受け付けていた。広告は、メキシコ系の人々の商店の広告が頻繁に載せられている点特徴的である。そして、他地域からの情報提供や地域ごとのレポートは、離れた所で活動する組合幹部やオーガナイザー同士、労働者同士を、精神的に結びつけていた。

次に、幹部からのメッセージについてである。記事のメインは、各地のストライキのことなど日々のニュースであるものの、そこに編集部のコメントがしばしばつけられている点特徴的である。例えば、果物農場で働く労働者500人以上が参加した会合の様子を伝える記事の下には、「我々は栽培主に以下のように言う。『目を覚ませ、そして20世紀に身を置きたまえ。農業労働者たちは二度と屈服することはないだろうし、あなた方が、我々を動物のようにいじめることを許さないだろう。』」と記されている(*El Malcriado* January 11, 1966 : 4)。小さな記事にもコメントを適宜つけることで、その事実から読み取って欲しいことや、組合の主張を発信していたと考えられる。また、記事にコメントを付すだけでなく、編集部が投書に対して返事を書いたりすることもあった。

新聞にはチャベスからのメッセージもしばしば掲載されている。その内容は、デラノのメンバーに対して、クリスマスパーティーを子どもたちの為に開いたりしてくれてありがとう、と礼を述べる日常的话题から(*El Malcriado Eng.* January 11, 1966 : 6)、労働関係法をめぐる共和党の抑圧に対抗しよう、といった政治的メッセージまで幅広いものであった(*El Malcriado Eng.* March 20, 1972 : 2)。編集部やチャベスからのメッセージを載せることで、あたかも彼らとつながっているかのような感覚を、農業労働者や運動を支持する市民に与えていたのである。

更に新聞は、演劇同様、敵を明確にする、という機能も持っていた。新聞の場合、その方法としては風刺漫画や写真が主であった。栽培主やスト破りが主な敵であった初期の頃は、「このスト破りの名前は？」と題し、スト破りの後ろ姿の写真を載せたクイズが掲載されたこともある (*El Malcriado Eng.* January 11, 1966 : 11)。遊び心を取り入れながら、栽培主やスト破りに対する労働者の敵対意識を高めていた。文字だけでなく写真や絵も効果的に用いたことで、新聞が演劇にとって代わる啓蒙の手段となったのである。

最後に、抗議行動のレポーターを伝達するという機能について言及したい。1960年代後半は、ボイコットを支援するための手順や、ボイコットの対象になるラベルと会社のリストが載せられた。時の流れと共にレポーターが変化すると、伝達の内容も変化した。1972年には、労働関係法を不当な形で労働者に適用しようとする共和党に抗議の手紙を送ろうという呼び掛けと共に、チャベスに、自分がどんな行動を起こしたかを報告するためのテンプレートも用意されている。また、チャベスの断食の様子が記事になる、投票を農業労働者の武器にするためにまずは選挙人登録を呼びかけるなど (*El Malcriado Eng.* April 1, 1968 : 8)、非暴力的な抗議行動の手法についても度々触れられた。一度に大勢の人に呼び掛けられる新聞においてこうした取り組みをしたことで、第Ⅱ節で述べたように、多数の支持者の獲得に繋がり、更にその支持が長期にわたって続いたのである。

ここまでで、人をつなぐ、敵を明確に描き出す、抗議行動のレポーターを伝達する、という三つの機能を組合紙が持っていたことが明らかになった。組合紙は、労働者の闘争意欲を高め、運動のレポーターを分り易く伝達し、農業労働者同士、幹部と農業労働者、組合と農業労働者以外の一般市民をつなげるといった目的の下に作られていた。実際、編集部も、新聞が「啓蒙」と「組織化」のために重要な手段であると明記している (*El Malcriado Eng.* January 12, 1973 : 11)。

農業労働者を啓蒙し、動員するために役立った演劇と新聞について言及

してきたが、二つのメディアと同様の役割を果たしていたもう一つの戦略として、リーダーであるチャベスの言動がある。3では、その点について言及する。

### 3 セサル・チャベスの言動

最後に挙げるのは、チャベスの言動である。

まず、農業労働者に対する個別の働きかけについて言及する。特に初期は、動員の基盤となるネットワークがないという障害を克服するために、チャベスは労働者とコミュニケーションを取り、意見を交わすことから取りかかった。チャベスは自ら足を動かし、どのような労働者が住んでいるのか、どういった要求を持っているのかを知ることからスタートさせた(Chávez 1966: 46)。彼は、それまでバラバラに存在していた農業労働者の中で、いわばブローカーとしての役割を果たしていた。草の根のコミュニケーションによって、チャベスを信じて行動を起こそう、と駆り立てられた人々のネットワークが構築されたのである。

そうした信頼をチャベスが獲得できたのは、労働者との直接のコミュニケーションを通じてだけではなかった。ここで、チャベスの言動の第二の要素として、スピーチを取り上げる。

チャベスは英語とスペイン語の両方を使い、労働者相手だけでなく大学や他の労働組合の会合など、様々な場所でスピーチを行った。チャベスのスピーチの一つの特徴には、時期や聴衆による内容の変化がある。

組合創設後間もない時期には、チャベスは、他のマイノリティを視野に入れながらも、メキシコ系の人々に照準を合わせて言葉を投げ掛けた。ここでは、1966年の行進の際にチャベスが多くの聴衆の前で読み上げた、デラノ宣言について取り上げる。デラノ宣言は、1911年のエミリアノ・サパタによるメキシコ革命での“Plan of Ayala”<sup>18)</sup>を意識して書かれたと言われており、エスニシティを強調した内容になっている。

我々はデラノ、マデラ、フレズノ、モデスト、ストックトン、サクラメントの全ての町について知っている。なぜなら、正にこの同じ道で、正にこの同じ谷で、メキシコ系の人々は数百年間犠牲になってきたからだ (*El Malcriado Eng.* March 17, 1966 : 12)。

こうした箇所はメキシコ系の人々のみを想定して語られている。しかし、宣言には以下のような箇所もある。

我々は、カリフォルニアにおけるメキシコ系やフィリピン系労働者の貧困は、全国の全ての農業労働者、黒人と貧しい白人、プエルトリコ系、日系、そしてアラブ系、すなわち合衆国の抑圧されたマイノリティを構成するすべての民族の貧困と同じものだということを理解している (*El Malcriado Eng.* March 17, 1966 : 13)。

あくまでメキシコ系というエスニシティを中心に据えながらも、チャベスは他のマイノリティとの連帯について、初期の頃から意識をしていたことがわかる。

次に、1970年代前半は、呼び掛けの対象が広がりつつあった過渡期と言える。ここでは、1971年に、テキサス州で行われたスピーチを取り上げる (Jensen and Hammerback 2008 : 54-61)。このスピーチでは、異なる内容が英語とスペイン語で話されており、その内容の違いをみることで、チャベスが聴衆に応じてどのようにコンテンツを使い分けていたのかがわかるのではないかと考えた。

初めの英語の部分は、①人々の暖かい歓迎への謝辞、②テキサスに来た理由、③ボイコットへの協力の呼び掛け、④運動は着実に前進しているということ、⑤ボイコットにまつわるエピソード、⑥他のマイノリティや組合との連帯、⑦目の前のメンバーのことを大切にしながらも、組織を大きくすることの重要性という7つのテーマに大きく区切ることが出来る。

一方、スペイン語の部分は、①組織化の重要性を訴えるためのメキシコの昔話の紹介、②昔の方がメキシコ系の人々が互いに助け合っていたこと、③家族を愛することの大切さ、④息子とのやりとりを通じて感じた若者のパワー、⑤教育の重要性という5つの大きなテーマが含まれている。英語とスペイン語を比較すると、英語の部分ではボイコットに参加して欲しいという訴えかけが、スペイン語の部分ではメキシコにまつわるエピソードや家族の話が中心に据えられている。すなわち、メキシコ系というルーツを大切にしながらも、全体としてはより多くの人に協力を呼びかけるというスタンスが取られている。

そして、そのスタンスは、1970年代後半以降、より強化されていく。例えば、1979年にテキサス州で行われた集会では、組合の目標を以下のように提示した (Jensen and Hammerback 2008 : 103)。

組合の旗の下で、民族、信条、性別、国籍に関係なく、農業労働者として雇用された全ての労働者が団結すること  
それぞれのメンバーの互いの利益と労働運動全体の連帯意識を構築するため、他の組合と協力すること

組合の目標を示すという、同じ趣旨を持つデラノ宣言と比較すると、その違いがはっきりと見て取れる。デラノ宣言では、「メキシコ系を中心としたマイノリティ」を強調していたのが、「民族以外の属性をも越えた全ての労働者」の団結を説き、「農業労働者の連帯」が「労働運動全体の連帯」へと拡大している。

以上、チャベスのスピーチについて見たが、その時々で誰を動員のメインターゲットとするのか、でチャベスのスピーチの場や内容が変化していたことがわかった。もちろん、上記の分析はあくまで一つの傾向にとどまるものである。しかし、時の流れと共に、チャベスのスピーチが、農業労働者にとどまらず、より広い範囲に届けられるようになっていったことは

明らかである。その結果、大学生がボランティアとしてストライキに参加したり、全米各地のスーパーマーケットでボイコットが継続的に行われたりしたのである。

最後にチャベスの特徴的な行動として挙げられるのが、断食<sup>19)</sup>である。チャベスが初めて断食を行ったのは、1968年2月14日から3月10日の25日間であった。彼は、運動が激化し、農業労働者も暴力的な方向に走ってしまう恐れがあった時期に、非暴力的な方法で闘うことの重要性を説くために断食を開始した。断食の間、デラノ付近にある組合の土地で、寝泊まりし、祈ることを繰り返した。そこには沢山の労働者が集まり、チャベスと共に祈りを捧げたという (*El Malcriado Eng.* March 15, 1968 : 3, 9)。

1972年5月12日には、アリゾナ州で6月まで続く断食を開始した。争点となっている商品そのものだけではなく、スーパーマーケット等、使用者の取引先の商品の不買を促す「二次的ボイコット」を禁止するアリゾナ州法への反対の姿勢を示したアリゾナ・キャンペーン時のことであった (*El Malcriado Eng.* June 9, 1972 : 3)。断食の際には、労働者がチャベスの元へやって来て、意見交換をする場が提供され、断食は一つの強力な組織化のツールになった (Taylor 1975 : 223)。チャベスが、「断食の中には、多くの個人的なコミュニケーションがあった。人々がやって来て、私が一言か二言口にすると、彼らは理解してくれた」と話しているように (Levy 2007 : 275)、コミュニケーションの「場」の提供が、断食の果たした一つの役割であった。

断食がチャベスの健康に与える影響は深刻であった。それでもなお、断食にこだわりを持ち続けていた理由として、農業労働者にとって親しみのない非暴力的レパトリーを実施するにあたり、自らが非暴力的な抗議行動を実践する必要があったのではないかということが考えられる。チャベスは、「誰かが1週間か10日間でも食べるのを止めれば、人々がやって来て、その経験の一部になりたがる」という言葉をのこしている (Jensen and Hammerback 2008 : 71)。チャベスは、暴力を一切排除して闘うとい

う信念を自ら体現し、非暴力的な方法で運動に参加するとは自分を犠牲にすることだ、そうした態度で運動に参加して欲しいとシンボリックな闘争を通して労働者たちに訴え続けたのである。それが、断食が担っていた二つ目の役割である。

## V おわりに

第IV節では、以下の通り UFW の問題が克服されていたことがわかった。第一に、農業労働者間のネットワークの不在は、①演劇、②コミュニケーションが取れる欄を多く設けた組合紙の発行、③チャベスが労働者に積極的に働きかけたこと、④団結を促すチャベスのスピーチ、⑤断食を行い、人が集まる場所を作り出すという五つの戦略を通して解決された。第二に、農業労働者にとって馴染みのないレパトリーの多用は、①新聞にボイコットのインスタクションを載せる等の工夫を施す、②チャベスが断食を行い、非暴力的なレパトリーを自ら体現するという二つの戦略によって主に解決された。そして第三に、外部資源が継続的に流入し続けていた背景には、①組合紙を通じた大々的な支援の呼びかけ、②聴衆及び時期に応じて変化するチャベスのスピーチが関わっていると考えられる。

これまでの議論を総括すると、本稿が提起した、なぜ複数の問題を抱えながらも、UFW は結果を出すことが出来たのかという問いには、以下のように応答出来る。UFW は、資源の不足については外部資源を活用することで、ストライキのリスクの高さについては、ストライキ以外の抗議行動を行うことで対応した。しかし、それでは解決することが出来なかった、運動に取り込めるネットワークの不在、親しみのないレパトリーの多用という問題は、成員間のコミュニケーションを戦略的に促進することで解決した。また、UFW に資源が継続的に流入していた背景には、組合独自のメディアを活用した支援の呼びかけ、積極的な外部とのコミュニケーションがあったことが明らかになった。チャベスが主導した農業労働者運動は、成員間及び組合と外部組織間の円滑なコミュニケーションに

よって支えられていたのである。

更に、本稿の議論を社会運動研究の文脈に位置づけると、本稿の独創性は以下の二点に集約される。

一点目は、社会的なネットワークを運動に取り込めなくとも、運動は成功を収められるという一つの事例を提示した点である。UFWは、一からネットワークを構築し、拡大することで運動に参加する人々を増やした。一つには、チャベスの戸別訪問や、断食の際の労働者との対話等、対面の直接的なコミュニケーションと、演劇、新聞といったメディアを通じた間接的なコミュニケーションを組み合わせるという、メソッドそのものの巧みさがある。更にそれだけでなく、発信されるメッセージの強力さやそれらが持つ意味も、人々の動員に寄与していた。このことは、運動を始める段階でほとんど資源が存在しなくとも、自分達が実践出来る一つひとつのツールをいかに使うかで運動の行く末が変わってくるということを示唆している。ただし、UFW以外の組織や運動についても言えることなのかという点までは本研究では明らかに出来なかった。

二点目は、抗議行動のレパトリーに関する知識の有無だけではなく、それが運用される過程に着目した点である。抗議行動を起こすのは現場の労働者や市民であり、リーダーに十分な知識があるだけで、様々なレパトリーを実際に運動の中で実行出来る訳ではない。知識と実行の間には、現場の人々に伝達するというもう一つの段階が存在する。UFWはレパトリーの伝達に長けていた。抗議行動のレパトリーに関する議論で一番初めに言われるのは、「知識の有無」であるが、選択したことの無いものをどう実行していくかという過程に目を配ることも重要である。

\*本稿は、2012年度に東京大学大学院に提出した修士論文に、加筆・修正を加えたものです。論文の執筆に際し、指導教官の石橋純先生を初め、和田毅先生、川上英氏に多大なるご指導・ご助言を戴き、また、本学会東日本部会の発表において中川正紀先生より、本誌掲載にあたり査読の先生方から、貴重

なご指摘を賜りました。心より御礼申し上げます。

#### 註

- 1) UFW は現在も活動を続けているが、本稿の射程範囲は組合が創設された1962年から組合の隆盛期である1970年代後半までとする。
- 2) 時代により組合の名称は何度か変化している。本稿では、特段断りのない限り、現在も使われている UFW という表記を統一して用いることとする。
- 3) 以下、「資源」という語は主に、活動費用といった意味での経済的な資源、及び運動を支援してくれる人的資源をまとめて指すものとする。
- 4) 具体的な内容は以下の通りである（黒田2000：65-76）。①メキシコ系の組合員同士のスペイン語での会話、②抗議行動の一環としてチャベスが行った断食明けの一大イベント、③デモ行進で掲げたグアダルペの聖母の図像、行進のゴールの日を「復活の日曜日」に設定する等、④組合の旗に描かれたアステカの鷲、メキシコ革命の英雄 Emiliano Zapata の絵、メキシコ独立記念日の集会、⑤集会・行進での音楽演奏、物語詩の朗読、⑥ルイス・バルデス率いる El Teatro Campesino の活動、⑦サパタやチャベス、組合活動を支援する壁画の7つである。
- 5) The Farmworker Movement Documentation Project, César E. Chávez Research Site 及び Cesar Chavez Foundation のインターネットアーカイブから主に入手した。
- 6) 資源動員 (resource mobilization) という言葉を初めて使ったのは、マッカーシーとゾルドである。詳しくは、McCarthy and Zald (1977) を参照されたい。
- 7) 米国労働総同盟産別会議。1955年に AFL (American Federation of Labor, 米国労働総同盟) と CIO (Congress of Industrial Organizations, 産業別組合会議) が合併して出来た。
- 8) ストライキ権の放棄など使用者側に有利な条項を含むものを指す。
- 9) 1972年には、4人のメキシコ系アメリカ人が州議会議員に選ばれた (Levy 2007: 468)。
- 10) 1930年代に仕事を求めてオクラホマ州から他の州へ移住した人を指す。
- 11) 「ブラセロ」とは、スペイン語の brazo に由来している。英語でいうところの hired hand、すなわち雇われ農場労働者と同じ意味を持つと解されている。
- 12) この運動では、バス内における白人と黒人の座席分離などの差別に対して反抗するため、5万人近くの黒人系住民がバスの利用を拒んだ (Blumberg

1991 : 3)。

- 13) Robert Francis Kennedy (1925-68) 民主党の政治家。第35代大統領ジョン・F・ケネディの弟。1961-64年に司法長官を務め、1964年には上院議員に選出。貧困の撲滅や、黒人問題に熱心に取り組むも、1968年6月、暗殺された。
- 14) 農業労働者演劇の基本的な情報については、Bagby and Valdez (1967), Huerta (1977), Valdez and El Teatro Campesino (1994) を参照した。
- 15) Luis Miguel Valdez (1940-) カリフォルニア生まれ。移民家庭の子供としては珍しく、奨学金を得て大学へ進学する。学生時代より演劇の脚本執筆をはじめ、1964年 San Francisco Mime Troupe へ入団。1965年から67年まで農業労働者運動の中で劇団を率いる。運動から離脱した後も劇作家・演出家として創作活動を続けており、代表作に、後に映画化もされるミュージカル『ズート・スーツ』(1978)がある。
- 16) メキシコで使われる挨拶語。“¿Qué hubo?”から派生したとされる。
- 17) 兄弟を意味する hermano から派生したとされる。
- 18) メキシコ革命動乱期の1911年、農民運動の指導者サパタによって発表された革命綱領である。
- 19) 一般に、闘争手段として絶食する行為は「ハンガーストライキ」と呼ばれる。しかし、チャベスは「例えば、私が食べ始めるまで君も食べないと言え、などといったら、それはハンガーストライキになるけれども、私はそのように圧力を与えることには賛同しない。それがハンガーストライキになるという意味においては、この行為はハンガーストライキではないのだ」という言葉を残していたという (Levy2007 : 274)。そうしたことを踏まえた上で、本稿では「断食」という表記を用いることとした。

## 参考文献

### 一次資料

Agricultural Labor Relations Act. *California Labor Code*. §§1140-1166.3. June 5, 1975.

([http://www.alrb.ca.gov/content/statutesregulations/statutes/statutes\\_default.html](http://www.alrb.ca.gov/content/statutesregulations/statutes/statutes_default.html) アクセス日2014年3月16日)

Chávez, César. 1966. “The Organizer’s Tale.” *Ramparts* 5 (2) : pp. 43-50.

———. 1968. “The Mexican-American and the Church.”

(<http://www.chavezfoundation.org> アクセス日2014年3月16日)

*El Malcriado* (English).

- (<http://farmworkermovement.com/archives/#nyt> アクセス日2014年3月16日)
- National Labor Relations Act. *29 United States Code*. §§151-169. July5, 1935.  
(<http://www.nlr.gov/national-labor-relations-act> アクセス日2014年3月16日)
- The New York Times*.  
(<http://farmworkermovement.com/archives/#nyt> アクセス日2014年3月16日)
- Time*, July 4, 1969 : pp. 16-21.  
(<http://farmworkermovement.com/archives/#nyt> アクセス日2014年3月16日)
- United States Congress. The Education and Labor Committee. 1969. *A Dialogue with Congress*. Washington, D. C.  
(<http://chavez.cde.ca.gov/researchCenter/default.aspx> アクセス日2014年3月16日)
- Valdez, Luis and El Teatro Campesino. 1994. *Luis Valdez—Early Works : Actos, Bernabé and Pensamiento Serpentino*. 2<sup>nd</sup> ed.  
(Houston : Arte Público Press).

## 二次資料

- 石橋純. 2000. 「聖像はいかにして聖人となるか——アフロベネズエラ文化におけるサン・ファン信仰」(『社会人類学年報』第26号)、21-50ページ。
- 黒田悦子. 2000. 『メキシコ系アメリカ人——越境した生活者』国立民族学博物館。
- 中川正紀. 1997. 「「農業労働関係法」の制定を求めた農業労働者の闘い——1965年～75年のカリフォルニア」(『札幌学院大学人文学部紀要』第60号)、237-260ページ。
- Bagby, Beth and Luis Valdez. 1967. “El Teatro Campesino Interviews with Luis Valdez,” *The Tulane Drama Review*, 11 (4), pp. 70-80.
- Blumberg, Rhoda Lois. 1991. *Civil Rights : The 1960s Freedom Struggle*, Revised ed. (Boston : Twayne Publishers).
- Bruns, Roger. 2005. *Cesar Chavez : A Biography*. (Westport : Greenwood Press).
- César E. Chávez Research Site  
(<http://chavez.cde.ca.gov/researchCenter/default.aspx> アクセス日2014年

3月16日)

- Chabot, Sean. 2002. "Transnational Diffusion and the African-American Reinvention of the Gandhian Repertoire," in Jackie Smith and Hank Johnston (eds.), *Globalization and Resistance: Transnational Dimensions of Social Movements*, (Lanham: Rowman and Littlefield Publishers, INC), pp. 97-114.
- della Porta, Donatella and Mario Diani. 2006. *Social Movements: An Introduction*, (Malden and Oxford: Blackwell).
- Farmworker Movement Documentation Project.  
(<http://www.farmworkermovement.us/>アクセス日2014年3月16日)
- Fisher, Lloyd. 1953. *The Harvest Labor Market in California*, (Cambridge, MA: Harvard University Press).
- Ganz, Marshall. 2000. "Resources and Resourcefulness: Strategic Capacity in the Unionization of California Agriculture, 1959-66," *American Journal of Sociology*, 105, pp. 1003-1062.
- Huerta, Jorge A. 1977. "Chicano Agit-Prop: The Early Actos of El Teatro Campesino," *Latin American Theatre Review*, 10 (2), pp. 45-58.
- Jenkins, J. Craig. 1985. *The Politics of Insurgency: The Farm Worker Movement in the 1960s*, (New York: Columbia University Press).
- Jenkins, J. Craig and Charles Perrow. 1977. "Insurgency of the Powerless: Farm Worker Movements (1946-72)," *American Sociological Review*, 42, pp. 249-268.
- Jensen, Richard J. and John C. Hammerback (eds.). 2008. *The Words of César Chávez*, (College Station: Texas A&M University Press).
- Levy, Jacques E. 2007. *Cesar Chavez: Autobiography of La Causa*, First University of Minnesota Press edition. (Minneapolis: University of Minnesota Press).
- McAdam, Doug. 1982. *Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930-70*, (Chicago: University of Chicago Press).
- McCarthy, John D. and Mayer N. Zald. 1977. "Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory," *American Journal of Sociology*, 82, pp. 1212-1241.
- Meister, Dick and Anne Loftis. 1977. *A Long Time Coming: The Struggle to Unionize America's Farm Workers*, (New York: Macmillan Publishing Co., Inc).
- Pawel, Miriam. 2009. *The Union of Their Dreams: Power, Hope, and Struggle in*

- Cesar Chavez's Farm Worker Movement*, (New York : Bloomsbury Press).
- Taylor, Ronald B. 1975. *Chavez and the Farm Workers*. (Boston : Beacon Press).
- Taylor, Verta and Nella Van Dyke. 2004. "Get up, Stand up" : Tactical Repertoires of Social Movements," in D. A. Snow, S. A. Soule, and H. Kriesi (eds.), *The Blackwell Companion to Social Movements*, (Malden, MA : Blackwell Publishing), pp. 262-293.
- Tilly, Charles. 1978. *From Mobilization to Revolution*, (Massachusetts. Addison-Wesley).
- UFW : The Official Web Page of the United Farm Workers of America.  
(<http://www.ufw.org/>アクセス日2014年3月16日)

〈Resumen〉

## **El movimiento de los trabajadores agrícolas dirigido por César Chávez en California, Estados Unidos : reconsideración de los factores del éxito**

**Futaba YOSHIKI**

Esta tesina trata sobre el movimiento de los trabajadores agrícolas dirigido por César Chávez. Chávez nació en 1927 y en 1962 fundó un sindicato de trabajadores agrícolas, en su mayoría de origen mexicano, el cual lideró hasta su muerte en 1993. Consiguió mejorar la situación de los trabajadores mediante protestas no violentas. Como resultado, en 1966 el sindicato firmó un acuerdo con una corporación sin precedentes en la historia de la industria agropecuaria de Estados Unidos. Y en 1975 se aprobó la Ley sobre Relaciones Laborales del Campo en California. En la tesina, se considera el movimiento como un éxito por el logro de ese acuerdo y la aprobación de la Ley.

Pero el movimiento tenía tres problemas : 1) Para los trabajadores agrícolas era difícil entrar en el movimiento porque no tenían mucho dinero. 2) Participar en las huelgas suponía un riesgo. Las corporaciones movilizaban esquirols y además los trabajadores estaban en peligro de ser despedidos o arrestados cuando hacían una huelga. 3) Las formas de protesta del movimiento, por ejemplo, boicots, marchas o peticiones, eran desconocidos para los trabajadores.

Esos problemas fueron como sigue. Primero, sobre la falta de recursos, la ayuda de varias organizaciones desempeñó un papel importante. Iglesias, estudiantes o políticos ayudaron a Chávez. Segundo, sobre el riesgo de la huelga, el sindicato trató de resolverlo combinando diversas formas de protesta. Pero el sindicato tenía dos problemas que no fueron solucionados: 1) La ausencia de una red social que pudiera utilizar en el movimiento, porque los trabajadores se mudaban constantemente en búsqueda de trabajo. 2) La falta de la familiaridad con los diversos repertorios de protesta aunque había resuelto el riesgo de la huelga. Además no se sabe por qué la ayuda de organizaciones externas concentró en el sindicato a largo plazo.

Esta tesina explica los factores que resolvieron los problemas anteriormente mencionados presentando las “estrategias de comunicación” que los líderes utilizaron. Se dividen en tres tipos de estrategias: 1) El teatro de los trabajadores agricultores, 2) El periódico del sindicato, 3) Las palabras y las acciones de César.

Tras el análisis, hemos llegado a las siguientes conclusiones. Primero, la ausencia de una red social era resuelta mediante cinco estrategias; ① El teatro que trabajaban para movilizar a los trabajadores mexicanos, ② La publicación de periódicos que establecían muchas secciones donde los miembros podían comunicarse, ③ La comunicación directa de Chávez con los trabajadores, ④ Los discursos que estimulaban la solidaridad entre los trabajadores, ⑤ Los ayunos de Chávez que formaron un espacio donde la gente se juntaba. Segundo, el empleo de los repertorios que los trabajadores no conocían bien era resuelto mediante dos estrategias; ① Las buenas ideas en sus periódicos, por ejemplo, se publicaron instrucciones de boicots, ② Los ayunos de Chávez que indicaban cómo luchar con actos no violentos. Tercero, sobre la razón de la afluencia de los recursos exteriores,

dos estrategias contribuyeron a su crecimiento; ① Los llamamiento a gran escala pidiendo apoyos en sus periódicos, ② La imploración de los discursos de Chávez separando sus materias según el auditorio y la temporada.

Cuando sitúo la discusión dentro de la teoría de los movimientos sociales, las partes originales de esta tesina están resumida en dos puntos como sigue. Primero, presenta un caso que tuvo éxito aunque no había una red social que el sindicato pudo utilizar en el movimiento. Segundo, observa el proceso de aplicación de los repertorios de protesta. La gente que causó la protesta fueron los trabajadores, por eso no pudieron utilizar las formas que no habían sido puestos en práctica solamente con el saber de los líderes. Esta tesina atiende a cómo los líderes transmitieron esos repertorios a la gente.